

同性愛者のアイデンティティ発達に関する研究の動向と展望

—内在化された同性愛嫌悪・カミングアウトに着目して—

高藤真作・岡本祐子

Trends and Prospects of Research on the Development of Homosexual Identity,
Focusing on Internalized Homophobia and Coming Out

Shinsaku Takafuji and Yuko Okamoto

Homosexuals are exposed to a great deal of discrimination and prejudice: Identifying as homosexual remains difficult in today's society. The purpose of this paper is to review current research on the development of homosexual identity, focusing on internalized homophobia and coming out. The development of homosexual identity is an important factor to prevent mental health problems, and overcoming internalized homophobia is indispensable in this process. Although emotional connections with others are important in the development of an individual's identity, internalized homophobia decreases the quality of personal relationships. Coming out has historically been considered an indicator of the development of one's sexual identity, but this is now being questioned. The act of coming out may be less important than the personal significance of coming out. Many models of sexual identity development are being proposed in international research, but there have been few studies on homosexuality in Japan. Furthermore, although gay, lesbian, and bisexual individuals are often treated as a single sexual minority, we should pay attention to each of these distinct groups. Coming out and internalized homophobia are related to the development of individuals' homosexual identity, but these individuals are also susceptible to cultural and environmental factors and trends. While assessing these differences, it is important to clarify the process and psychological background of coming out, and how homosexuals overcome internalized homophobia.

キーワード : homosexual, sexual identity, internalized homophobia, coming out

1. はじめに

2015年にアメリカの連邦最高裁判所が全州での同性結婚を認める判決を出し、国内においても渋谷区を初めとした、各自治体で同性パートナーシップ条例ができ始め、メディアでも LGBT(レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダーの総称)という言葉が日常的に取り上げられるなど、セクシュアルマイノリティ(性的少数者)への関心は高まってきている。しかし、同性愛への差別や偏見が存在しなくなったわけではなく、同性愛者が社会を生きていく上で大きな弊害となっている。臨床心理学の分野においても近年当事者を対象とした研究が蓄積されつつあるものの、数も少なく十分に検討がなされているとは言い難いのが現状である。同性愛者が差別や偏見のある社会の中でいかにして自らのセクシュアリティを受容していくのか、本論文では同性愛者のアイデンティティに関する研究を、アイデンティティ発達と関連のある同性愛嫌悪の内在化と、アイデンティティの発達の指標の1つとされていたカミングアウトに着目して研究動向を概観し、これまでの研究成果と今後の課題について検討する。

2. 同性愛の定義

人間は①身体の性 (Sex ; 生物学的な身体の性), ②自分の性への認識である心の性 (Gender Identity ; 性自認), ③文化的に作られた社会的な性 (Gender ; 性役割), ④性的欲望や恋愛感情の対象を示す性的指向 (Sexual Orientation), 主にこの4つの要素によって多様なセクシャリティ (性に関する行動や傾向の総称)が構成されている(葛西, 2011 ; 松嶋, 2012)。またそれぞれは単純に男女二つに二分できるわけではなく、実際の性のあり方は多様である。その中でも②性自認に対して④性的指向が同性に向く場合を同性愛 (Homosexual) と呼び、性別によって男性同性愛者をゲイ (Gay), 女性同性愛者をレズビアン (Lesbian) と呼ぶ。また性的指向が両性に向く場合を両性愛 (Bisexual)と呼び、総称してLGB, または①身体の性と②性自認の性別が異なるトランスジェンダーも含めて、LGBT と呼称することがある。また、性同一性障害の人々の中にも性的指向が性自認と同性に向いており、自らのセクシャリティを同性愛であると認識している人も存在する (葛西, 2011)。

精神医学の面においては、かつて同性愛は「疾患」とされ、診断基準がICD(国際疾病分類)にも記載されていた。しかし、1969年にニューヨークで起こったストーンウォール事件を皮切りにゲイ解放運動は激化し、活動家らは、同性愛は病気ではないこと主張した。この運動により1973年にアメリカの精神医学会は精神障害の診断マニュアル(DSM IV)のリストから同性愛という項目を完全に削除され、性的指向障害(Sexual orientation disturbance)へと変更された。これに続きアメリカ心理学会も1975年に精神医学会の行動を支持することを表明した。さらに1980年のDSM-IIIで自我異質性同性愛(Ego dystonic homosexuality)という名称に変更され、1987年のDSM-III-R以降では同性愛に関する診断分類は完全になくなった。1993年には世界保健機構(WHO)の全ての公式文書に記載された病名のリストから「ホモセクシャリティ」の文字は削除されている(石丸, 2003 ; 石井, 2009 ; 桐原・坂西, 2003a)。日本では1980年代後半からAIDSと男性同性愛者を結びつけた報道が度々行われたことや1990年に東京都教育委員会が管理する青少年向けの宿泊・学習施設「府中青年の家」

が同性愛者の団体の宿泊を拒否した事件（1997年に全面勝訴判決）を契機に同性愛者に対する関心が生まれ、1995年には日本精神神経学会が同性への性的指向事態を精神障害とみなさないことを公式に回答している（石丸，2003；杉山，2006）。

3. 同性愛者を取り巻く環境と精神的健康

同性愛は“疾患”ではなくなったものの同性愛に対する差別や偏見は以前残されているのが現状である。研究者らは、スティグマ、偏見、差別によって同性愛者・両性愛者にとって生きにくい社会環境が構成され、スティグマ化された人々は一般的に体験するストレスに加えて、個人を超えた社会構造に由来するマイノリティストレスに慢性的に曝されることで、精神保健上の問題を引き起こすと主張している(Meyer, 2003)。同性愛者・両性愛者であることが、自殺念慮、自殺企図を予測し、自傷行為、心理療法や精神医学的な治療経験にも影響を与えていること (Balsam, Beauchaine, Mickey & Rothblum, 2005)、異性愛者と比較して、男性同性愛者および女性同性愛者は、物質使用障害、情動障害および自殺を含む、より精神的な問題を抱えていることがこれまでの研究で示唆されてきている (Cochran, 2001; Sandfort, Graaf, Bijl & Schnabel, 2001)。日本においても差別や偏見は存在し、異質性を極端に嫌う文化の存在、性に対する消極的な価値観が性的マイノリティの立場を劣位へと追い込んでいること (梅宮, 2002)、また、寡黙の言語習慣がある日本の特性として、性的マイノリティへの差別的対応が、「無知、揶揄、茶化し、笑い、冷やかし、文章表現のちょっとした遊び」となって表れる傾向があること、同性愛者への差別が場の空気・雰囲気で疎外し排撃する傾向があること(小宮, 2015) が指摘されている。

石丸 (2002) は、性的マイノリティはマイノリティ・グループと呼ばれる集団の中でも可視性の低いグループであることを挙げており、同性愛者は同性愛者であることを知られずに過ごすことも可能である。そのため、差別や偏見に曝されるリスクや、それによる社会的な不利益を避けるために、異性愛者として振る舞うことが多い。しかし、異性愛者を装うことで直接的な差別を回避できる一方で、日高 (2000, 2007) は、数千人規模のインターネット調査から、男性同性愛者・両性愛者で異性愛者的役割葛藤を強く感じ、異性愛者を装うことにストレスを強く感じている者ほど、抑うつ傾向、特性不安、孤独感が一般集団に比べて有意に高く、自尊心は有意に低いこと、全体の65%に自殺念慮経験があり、15%に自殺未遂経験があったことを明らかにしている。

杉山 (2006) は、同性愛の若者が自己形成を行う過程で経験する困難を、①自己受容の困難、②自己イメージの困難、③情報アクセスの困難、④自己開示・人間関係作りの困難、⑤事故回避の困難の5つにまとめている。石丸 (2002) は民族的マイノリティと比べた時に家族の理解を得にくいこと、マイノリティの属性が非常にプライベートな事柄であり語りにくいことも性的マイノリティの特徴として挙げており、親が同じマイノリティではないことや、異性愛者を装うことによって、ソーシャルサポートやロールモデルが得られにくいために、同性愛者が自らのセクシャリティを受容し、肯定的なアイデンティティを形成していくことは容易ではない。宮腰 (2012) は性的指向の受容をライフイベントの中でも最も危機的な体験であると述べており、同性愛者としてのアイデンティティ形成について明らかにすることは同性愛者への心理的支援に役立つものであると思われる。

4. アイデンティティ発達のモデル研究

肯定的な同性愛者・両性愛者としてのアイデンティティを形成することが抑うつ、不安、依存症、自殺未遂などの精神的な問題の予防や、自尊心の向上につながるということが指摘されている (葛西, 2014; Rosario, Schrimshaw & Hunter, 2011)。同性愛者のアイデンティティ発達モデルとして Cass (1979) は 6 段階のモデル (①アイデンティティの混乱; identity confusion, ②アイデンティティの比較検討; identity comparison, ③アイデンティティの許容; identity tolerance, ④アイデンティティの受容; identity acceptance, ⑤アイデンティティの自信; identity pride, ⑥アイデンティティの統合; identity synthesis) を作成している。このモデルは、自らの同性愛的傾向を認識することで自己概念が混乱し、同性愛者であることを徐々に認めつつも、他の同性愛者との接触を試みる中で同性愛を受容していき、同性愛者であることは自らを形作る構成要素のひとつであると気づき、統合されていくというプロセスをたどる。Cass (1984) は、質問紙調査の結果からアイデンティティの混乱と比較検討、アイデンティティの自信と統合の間に明確な差異がなく 4 段階となる可能性を指摘し、さらに 6 段階モデルの前に自らを異性愛者と認識している段階を追加する修正を行っているが、現在でも広く知られているモデルの 1 つである。また、Troiden (1989) も Cass (1979, 1984) と同様のプロセスをたどる 4 段階のモデルを作成しており、他の当事者との関わりによってセクシュアルアイデンティティ形成、孤独感や疎外感の低減が促進され、異性愛者へのカミングアウトの増加や、異性愛者と同性愛者を二分した考えの修正が見られるようになることを述べている。その他にも他者にカミングアウトし、受容される体験を重視する Coleman (1982) のモデルや、自分自身の性的指向への態度や自分と同じ性的指向を持つ人への態度など各領域での発達を考慮した McCarn & Fassinger (1996) のモデルが存在する。また、同性愛者・両性愛者といったラベリングは自己認知に基づくものであるが、近年では同性への程度惹かれるかという性的指向の程度と、自らラベリングした性的指向アイデンティティを分けてアイデンティティ発達を研究したものなど、セクシュアルアイデンティティを理解する上で、欲求、行動、認知などを組み込んだ、より包括的かつ多次元的な性的アイデンティティの概念化を採用している (Horowitz & Newcomb 2001; Worthington & Reynolds, 2009)。

石丸 (2003) は多くの同性愛者のアイデンティティ発達モデルが①同性愛に対して嫌悪感を持つ時期、②同性愛と異性愛のどちらに価値をおくか混乱し揺れ動く時期、③同性愛、異性愛ともに安定した価値づけができ、同性愛が自己に統合された時期、という変遷をたどることを述べている。同性愛者は迫害・拒絶され、同性愛嫌悪的なジェンダー規範を持つ社会に暮らす同性愛者は、特に①の同性愛に対して嫌悪感を持つ時期において、同性愛者への社会の扱い、周囲の同性愛に対する反応によって学習された同性愛嫌悪を内在化した状態であることが指摘されている (眞野, 2014)。

5. 内在化された同性愛嫌悪とアイデンティティ

内在化された同性愛嫌悪 (internalized homophobia) とは「他の同性愛者や自らの同性愛に対してのネガティブな態度や影響 (Shidlo, 1994)」, 「社会通念として存在する同性愛への偏見をそのまま

内面化した価値観を持つこと(石丸, 2003)」と定義されている。内在化された同性愛嫌悪は、同性愛への愛情や欲望の経験と、異性愛者である必要性を感じることに生じる内的な葛藤を特徴とし、自分自身や他の同性愛者への否定的な態度として現れる (Herek, 2004)。そして、同性愛者、両性愛者のアイデンティティ発達理論において、アイデンティティの発達過程で一般的に経験されるものとされており、内在化された同性愛嫌悪を克服することが健康な自己概念の発達に必須である (Cass, 1979; Mayfield, 2001; Troiden, 1989)。また、性的指向は「欲求」、「行動」、「自己認識 (アイデンティティ)」の3つの要素から構成されているが (Laumann, Gagnon & Michaels, 1994)、内在化された同性愛嫌悪が極端な場合には、社会的な偏見の影響で自分が同性に惹かれるという事実を受け入れられずに、同性愛という性的指向を拒絶し、同性愛者という自己認知を行わない可能性も指摘されている (石丸, 2005; Frost & Meyer, 2009)。Amola & Grimmert (2015) では、男性との性的接触経験を持つ男性 (MSM; Men who have Sex with Men) において、自らを異性愛者とラベリングする対象者は有意に内在化された同性愛嫌悪の得点が高いという結果を示している。さらに、内在化された同性愛嫌悪の得点が高い当事者ほど孤独感 (Szymanski & Chung, 2001)、抑うつや異性愛友人・知人への自己開示の少なさ (Herek, Cogan, Gillis & Giunt, 1998)、アルコールへの依存や薬物の使用 (Weber, 2008)、HIV リスク行動、低い自尊心 (Amola & Grimmert, 2015) と関連がみられる。

内在化された同性愛嫌悪の因子として、Ross & Rosser (1996) は以下の4つの側面を明らかにしている。①同性愛者としての同一化 (Public identification as gay): 誰かに自分が同性愛者であることを知られるのは心配ではない。②同性愛者スティグマの知覚 (Perception of stigma associated with being homosexual): ほとんどの人は同性愛に対して否定的な反応をする。③社会的居心地の良さ (Social comfort with gay men): ゲイバーに居心地の良さを感じる。④道徳的・宗教的な同性愛の受容 (Moral and religious acceptability of being gay): 同性愛は神の意志に反している。それ以外にも内在化された同性愛嫌悪を測定する尺度として Nungesser (1983) による同性愛への態度尺度 (Nungesser Homosexuality Attitudes Instrument; NHAI) や Shidlo (1994) による NHAI の改訂版などが存在する。しかし、Frost & Meyer (2009) は内在化された同性愛嫌悪を概念化する上で、カミングアウト、LGB コミュニティとの繋がり (Mayfield, 2001; Shidlo, 1994; Williamson, 2000) が重要視されていることは共通であるが、場合によっては抑うつや自殺念慮 (Nungesser, 1983; Shidlo, 1994)、未来への絶望 (Szymanski & Chung, 2001) などを含むことがあるなど、研究者の間で一定の見解を得ていないことを指摘している。これらは内在化された同性愛嫌悪を捉える1つの視点とはなるものの、必ずしも同性愛嫌悪の内在化によるものと判断することには注意する必要があると思われる。

6. 内在化された同性愛嫌悪とコミュニティ

内在化された同性愛嫌悪の克服がアイデンティティ発達に不可欠であると同時に、同性愛者のセクシャルアイデンティティを形成する上で他の当事者とのポジティブな関わりをもつことも重要視されている (Cass, 1979; Troiden, 1989)。しかし、同性愛嫌悪を内在化した当事者ほど同性愛コミュニティへのつながりの感覚の低さ (Herek et al, 1998)、他者との関係性の問題 (Frost & Meyer, 2009) を抱えており、同性愛嫌悪を抱えた当事者が他の当事者との関係を築いていくことの困難さ

が推察される。同性愛者・両性愛者に対して“同性愛者の人々は親密な関係や、長期的で健康的な関係を維持することができない”という根拠のない価値観 (Meyer & Dean, 1998)や、同性愛者・両性愛者の当事者が同性愛への恥や価値下げを内在化させ、他の当事者との対人関係においてその影響が最も明白に現れる (Coleman, Rosser & Strapko, 1992) など、内在化された同性愛嫌悪が他の当事者へのネガティブな態度として現れることで関係の質が低下しやすいことが予想される。また、同性愛嫌悪を内在化させている当事者ほど性的衝動性 (Dew & Chaney, 2005) が高く、人間関係の質と満足度の低下、同性愛に対する否定的な感情を緩和するために、他の当事者との長期的で親密な関係を回避し、性的な形で表現される可能性も指摘されている (Frost & Meyer, 2009)。

日本においても、宮腰 (2013) は同性愛コミュニティの特徴として人間関係の切れやすさ、閉鎖性、匿名性、性的な側面が強調されることを挙げている。異性愛者としての「昼の生活」と、同性との性的関係、恋愛関係を持つ「夜の生活」を分けて生きる既婚男性、同性愛に関する明確な自覚やアイデンティティを持っていないものの、行動面では男性と性的な関係を持つ男性など、当事者の他の当事者との繋がりや、ライフスタイル、価値観などは非常に多様 (安尾, 2017) であり、その背後にある心理的背景を明らかにする必要があると思われる。

7. カミングアウトの問題

カミングアウトは同性愛者・両性愛者のアイデンティティの形成と統合に不可欠な要素であり、発達の指標になるとする見方がある (Cass, 1979; Coleman, 1982; Rosario, Hunter, Maguen, Gwadz, & Smith, 2001)。カミングアウトとは、自分以外の他者に自らのセクシャリティを明確な形で宣言することであり、周囲からの圧力によってセクシャリティを表明することができない状況のことをクローゼットと呼ぶ (金田, 2003)。Cass (1979, 1984) のモデルにおいては、次第に異性愛者へのカミングアウトが増え、異性愛者との肯定的な接触が増えることで同性愛者と異性愛者として二分された見方が統合されていくとしている。同性愛者は一般的な社会を“異性愛者の世界”、同性愛者のみの存在する世界を“同性愛者の世界”と区別するが (石丸, 2008)、渡辺 (2005) は、当事者は異性愛者との関係において、寄せられる信頼に応えられない罪悪感などの心的負担の軽減や、信頼をより深めたいとする期待感の高まりから、自らの性的指向を明かした上での新たな関係づくりを求めていくことを報告している。つまり、カミングアウトは異性愛者との関係性の再構築や、当事者の中で同性愛者・異性愛者と二分された世界を統合させていく1つの手段であると思われる。

また、重要な他者にカミングアウトすることは自らの同性愛を受け入れ、それに対する葛藤を克服したことを示すという考え方から、内在化された同性愛嫌悪の指標とみなされることもあり、内在化された同性愛嫌悪の克服やアイデンティティの発達がカミングアウトには必要であると指摘されている (Pistella, Salvati, Ioverno, Laghi & Baiocco, 2016)。カミングアウトは同性愛者・両性愛者の人々にとってより高い自尊心 (三宮, 2014; Savin-Williams, 1989) など肯定的な影響を及ぼすことも示唆されている。

そして、カミングアウトをせずに生きることで閉塞感や孤独感を強めること、異性愛者を装う葛藤につながることも危惧されている。“異性愛者の世界”で窮屈な思いをしている同性愛者にとって、

なにも隠す必要のない“同性愛者の世界”は居心地がよく、“同性愛者の世界”に依存することで“異性愛者の世界”での現実味が薄れ、過度な異性愛者嫌悪や、家族や友人、学校などからの乖離を招く可能性が指摘されている(有馬・園田, 2010; 宮腰, 2013)。

一方で、同性愛者であることのカミングアウトを行うことには環境的要因が含まれており、社会的不利益が予測できる場合には自らを守ることに繋がる。そのため、アイデンティティ発達の指標として用いるのは適切ではないという指摘もある(Frost & Meyer, 2009)。桐原・坂西(2003b)では、男性同性愛者に対して「なよなよしている」といった否定的イメージが見られる。カミングアウトに対しては否定的でない人であっても、自らに好意を向けられた場合、事態が他人事ではなくなり、当事者としての「身の危険」や「襲われるといった不安」を感じるなどの否定的な反応が生じやすく、山本・大蔵・重本(2012)においてもより身近な他者が同性愛者であることや、同性愛者から好意を向けられることに対しては拒否感を感じやすいことが示されている。以上のようにカミングアウトに対して拒絶の反応も予想される場合、家族や友人からの拒絶などこれまでの関係性の崩壊や、差別や偏見、学校での嫌がらせなど敵意を向けられるリスクもある。カミングアウトの効果についても、石丸(2005)は、受容体験によって自尊心は上昇するが、そこにカミングアウトの有無は影響せず、カミングアウトせずに過ごすことも個人的な社会適応の面では十分適応的であると述べており、カミングアウトがそれほど有益でないことを示唆している。

カミングアウトすることとしないこと、それぞれにおいて問題点が指摘されており、同性愛者の性的指向のカミングアウトについての研究は一定の見解を得ていない。そのため、カミングアウトの是非については、臨床現場ではカミングアウトを行う意味が重要であると考えられており(柘植, 2014)、カミングアウトの有無だけではなく、カミングアウトに至るまでの心理的背景やそのプロセスを検討することが重要であると思われる。

8. 性別と性的指向の程度による差異

男性同性愛者・女性同性愛者・両性愛者はLGBとして総称されることもあり、セクシュアルマイノリティとして、ひとまとめに論じられることも少なくない。しかし、性別による差異や、同性愛者であるか両性愛者であるかによる差異の影響も考慮する必要があると思われる。

和田(1996, 2008)は女性よりも男性、そして伝統的な性役割規範の強い者ほど同性愛に対して否定的な態度であることや、女性同性愛者よりも男性同性愛者がネガティブな態度をとられやすいことを指摘している。これは、社会的に男性のほうが「男らしさ」を求められやすく、男性的な女性よりも女性的な男性のほうが受け入れがたいためだと考えられる。そのため、男性同性愛者はより同性愛嫌悪的な態度に曝されやすい可能性が考えられ、Herek et al(1998)では、同性愛嫌悪の内化の程度は女性同性愛者よりも男性同性愛者のほうが同性愛嫌悪をより内化していた。

女性同性愛者特有の問題としては、「女性」であるために性的欲求を社会的に抑圧されていること(三宮, 2014)、日本社会における賃金や平均年収の格差から、男性カップルよりも女性カップルのほうが経済的に苦しい状況に置かれている可能性が高いこと、男性優位な社会において「女性」として経験する無力感などから、女性同性・両性愛者の精神的負担は男性同性・両性愛者とは異なっ

ていること (石井, 2009 ; 伊藤・葛西, 2011) などが先行研究では示唆されてきている。また, 宮腰 (2012) において, アイデンティティを模索する際に性同一性障害の可能性を考えた当事者は全て女性同性愛者であったことも報告されている。

同性愛者について Weber (2008) では, 男性同性愛者・女性同性愛者は両性愛者よりも多く異性愛中心的な出来事を体験したことを報告しており, 桐原・坂西 (2003a) は, 両性愛者は性的指向が異性にも向くため, 自らのセクシャリティを意識する程度が異なること, カミングアウトの必要性が低いことを示唆している。しかし, その一方で, 両性愛が単なる同性愛に移行する時期とする見方や, より性に奔放で, 無差別に一度に複数の人と関係を持つといった同性愛嫌悪とは質の異なる, 両性愛特有のステレオタイプが存在することも指摘されている (Eliason, 1997; 2001)。

以上で挙げたように, 男性同性愛者と女性同性愛者, 両性愛者では抱える困難に質的な差異が生じる可能性があるため, 研究を行う上では留意しておく必要があると思われる。

9. 日本における同性愛研究の動向

日本における同性愛に関する研究は近年盛んになりつつあるが, 主に社会学, 文学など他領域での研究も多く, 心理学の枠組みで行われた研究は数が少ない。心理学における同性愛研究として, 同性愛やカミングアウトに対する異性愛者の態度研究と, 当事者を対象とした当事者の抱える困難さに関する研究に分けることができる。異性愛者の態度に関する研究として, 杉山 (2006) は同性愛嫌悪には同性愛を例に出し, そのつど否定や排除を試みる積極的同性愛嫌悪型と, 同性愛に関して意図的, 無意図的に触れない消極的同性愛嫌悪型 2 つの類型を考え, 生徒同士においても同様の同性愛嫌悪の類型を見出している。また, 同性愛者の性別や, 回答者の性別, 伝統的役割観との関連を見た研究 (和田, 1996 ; 2008) や, 同性愛者のカミングアウトへの態度に関する研究 (桐原・坂西, 2003b ; 和田, 2010 ; 山本他, 2012), カウンセラーの男性同性愛者に対するクリニカル・バイアスの影響を検討した研究 (品川・兒玉, 2005 ; 品川, 2006) などが存在し, これらは同性愛者を取り巻く環境や価値観を明らかにしている。当事者を対象とした研究としては, 日高 (2000, 2007, 2014) はインターネットを用いた数千人規模の調査を行い, 同性愛者のメンタルヘルスの実態や, 同性愛者の経験するライフイベント, 日高・市川・木原 (2004) は HIV 感染リスク行動と精神的健康の関連を指摘している。また, その他にもカミングアウトの効果やカミングアウトへの意識 (石丸, 2005 ; 梶谷・横山, 2007), 女性同性愛者の抱える問題とソーシャルサポートの在り方や生きづらさ (石井, 2009 ; 伊藤・葛西, 2011) などインタビュー調査や質問紙実験等によって当事者がどのような困難を抱え, どのように対処してきたのかも明らかになってきている。

しかし, 当事者を対象とした研究の中でも, 同性愛者のアイデンティティ発達についての研究はほとんどなされていない。主な先行研究としては, 堀田 (1998) が学生相談に訪れた男子学生のセクシャルアイデンティティ発達の形成過程を Troiden のアイデンティティ形成モデルを参照して検討したものや, 宮腰 (2012, 2013) のセクシャリティの受容のプロセスとカミングアウトやコミュニティにおける危機を検討したものが存在する。宮腰 (2012, 2013) は自己, 人間関係, 社会の 3 つの視点から現代のセクシュアルマイノリティの若者が抱える危機とその回復を包括的に捉え, セ

クシュアルマイノリティのコミュニティがセクシュアリティの受容を促す一方で、コミュニティ独特の文化への馴染めなさを抱える当事者の存在を報告している。今後もより詳細な検討が必要ではあるものの、有馬・園田 (2010) が当事者へのアクセスの困難さを指摘しているように、当事者を対象とした研究を行うことが容易ではない。また、当事者を対象とした先行研究においても調査対象者が少ない場合が多く、一般化が難しい点も課題であると思われる。さらに、日高 (2007) では65.9%が自殺念慮を経験しているのに対し、同性愛の受容への葛藤が少ない当事者の存在や、自らのセクシュアリティを円滑に受け入れている当事者も少なくないことが渡辺 (2005)、宮腰 (2012) では示唆されている。その点について、宮腰 (2012) は、内在化された同性愛嫌悪やロールモデルの不在が徐々に解消されつつあることと同時に、対面式のインタビュー調査では精神的健康度が高い当事者が集まりやすいことを要因として考察しており、調査対象者の偏りについても考慮する必要があると思われる。

10. 今後の課題と展望

本論文では同性愛者のアイデンティティ発達に関する研究を、内在化された同性愛嫌悪とカミングアウトに着目して概観してきた。同性愛者のアイデンティティ発達や精神的健康において、内在化された同性愛嫌悪が重要な要素であることは先行研究から示唆されているが、日本において、海外のアイデンティティ発達のモデルや、内在化された同性愛嫌悪については部分的に述べられているに留まっている。内在化された同性愛嫌悪は、時代や文化・社会的背景に左右されやすく、我が国においても改めて詳細に検討する必要があると思われる。さらに、内在化された同性愛嫌悪によって他の当事者との関係を築きにくいことから、アイデンティティ発達が容易ではないことが予想される。当事者が内在化された同性愛嫌悪をどのように克服し、同性愛者のアイデンティティを発達させていくのかのプロセスを明らかにする必要もあると思われる。

また、アイデンティティ発達や、内在化された同性愛嫌悪の指標の1つとしてカミングアウトが挙げられているが、先述したように、カミングアウトの是非については環境的要因に左右される性質があり、一定の見解を得られていない。カミングアウトの生起には個人の内的な要因以外の要素も影響しやすいことから、必ずしもアイデンティティ発達にカミングアウトが必須ではないと思われるが、カミングアウトに至るプロセスや心理的な背景について詳細に検討することは同性愛者のアイデンティティ発達を捉える1つの視点として有用であると思われる。

引用文献

- Amola, O., & Grimmert, M. A. (2015). Sexual identity, mental health, HIV risk behaviors, and internalized homophobia among black men who have sex with men, *Journal of Counseling & Development*, 93(2), 236-246.
- 有馬将太・園田直子 (2010). 同性愛者のセクシャリティー研究の視点と展望ー 久留米大学心理学研究, 9, 89-97.
- Balsam, K. F., Beauchaine, T.P., Mickey, R. M. & Rothblum, E. D. (2005) Mental health of lesbian, gay,

- bisexual, and heterosexual siblings: Effects of gender, sexual orientation, and family, *Journal of Abnormal Psychology*, 114(3), 471-476.
- Cass, V.C. (1979). Homosexual identity formation: a theoretical model. *Journal of Homosexuality*, 4(3), 219-235.
- Cass, V.C. (1984). Homosexual identity formation: Testing a theoretical model. *Journal of Sex Research*, 20(2), 143-167.
- Cochran, S. D. (2001). Emerging issues in research on lesbians' and gay men' s mental health: Does sexual orientation really matter? *American Psychologist*, 56, 931-947.
- Coleman, E. (1982). Developmental stages of the coming out process. *Journal of Homosexuality*, 7(2-3), 31-43.
- Coleman, E., Rosser, S., & Strapko, N. (1992). Sexual and intimacy dysfunction among homosexual men and women. *Psychiatric Medicine*, 10, 257-271.
- Dew, B. J. & Chaney, M. P. (2005). The relationship among sexual compulsivity, internalized homophobia, and HIV at-risk sexual behavior in gay and bisexual male users of internet chat rooms. *Sexual Addiction & Compulsivity*, 12(4), 259-273.
- Eliason, M. J. (1997). The prevalence and nature of biphobia in heterosexual undergraduate students. *Archives of sexual behavior*, 26(3), 317-326.
- Eliason, M. J. (2001). Bi-negativity: The stigma facing bisexual men. *Journal of Bisexuality*, 1(2-3), 137-154.
- Frost, D. M. & Meyer, I. H. (2009). Internalized homophobia and relationship quality among lesbians, gay men, and bisexuals. *Journal of Counseling Psychology*, 56(1), 97-109.
- Herek, G. M., Cogan, J. C., Gillis, J. R. & Glunt, E. K. (1998). Correlates of internalized homophobia in a community sample of lesbians and gay men. *Journal of the Gay & Lesbian Medical Assn*, 2(1), 1998.17-25.
- Herek, G. M. (2004). Beyond 'homophobia': thinking about sexual prejudice and stigma in the twenty-first century. *Sexuality Research & Social Policy: A Journal of the NSRC*, 1(2), 6-24.
- Hershberger, S.L. (1993). Lesbian, gay, and bisexual youth in community settings: Personal challenges and mental health problems. *American Journal of Community Psychology*, 21, 421-447.
- 日高 庸晴 (2000). ゲイ・バイセクシュアル男性の異性愛者的役割葛藤と精神的健康に関する研究 思春期学, 18(3), 264-272.
- 日高 庸晴 (2007). 社会調査から見た性的指向と健康問題 (「ジェンダー」再考) 女性学評論, 21, 49-66.
- 日高 庸晴 (2014). ゲイ・バイセクシュアル男性の HIV 感染リスク行動とそれに関連する心理・社会的要因—全国インターネット調査の結果から— HIV 感染症と AIDS の治療, 5(2), 38-44.
- 日高 庸晴・市川 誠一・木原 正博 (2004). ゲイ・バイセクシュアル男性の HIV 感染リスク行動と精神的健康およびイベントに関する研究 日本エイズ学会誌, 6, 165-173.

- 堀田 香織 (1998). 男子大学生の同性愛アイデンティティ形成 学生相談研究, 19(1), 13-21.
- Horowitz, L. J. & Newcomb, D. M. (2001). A multidimensional approach to homosexuality identity. *Journal of Sex Research*, 42, 1-19.
- 石井 香里 (2009). 女性同性愛者が抱える生活上の問題に対する当事者の姿勢—同性パートナーと同居する女性のインタビュー調査から— 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要 3(1), 65-76
- 石丸 径一郎 (2002). マイノリティ・グループ・アイデンティティ：人はいかにして自らに付与された差異を取り扱うか 東京大学大学院教育学研究科紀要, 41, 283-290.
- 石丸 径一郎 (2003). レズビアン, ゲイ, パイセクシャルについて 心身医学, 44(8), 590-594.
- 石丸 径一郎 (2005). 性的マイノリティにおける受容体験と自尊心—カミングアウトの効果に関する実験的検討— コミュニティ心理学研究, 9(1), 14-24.
- 石丸 径一郎 (2008). 同性愛者における他者からの拒絶と受容：ダイアリー法と質問紙によるマルチメソッド・アプローチ ミネルヴァ書房
- 伊藤 瑠里子・葛西 真記子 (2011). セクシュアル・マイノリティの抱える「生きづらさ」とソーシャルサポートの在り方：女性同性愛・両性愛者への半構造化面接を通して 鳴門教育大学学校教育研究紀要, 26, 95-103.
- 金田 智之 (2003). 「抵抗」のあとに何が来るのか？—フーコー以降のセクシュアリティ研究に向けて— 年報社会学論集, 16, 126-137.
- 梶谷 奈生・横山 恭子 (2007). 同性愛者の開示/非開示に関する意識—同居する同性カップルの事例から— 上智大学心理学年報, 31, 111-118.
- 葛西 真記子 (2011). 同性愛・両性愛肯定的カウンセリング自己効力感尺度日本語版 (LGB-CSIJ) 作成の試み 鳴門教育大学研究紀要, 26, 76-87.
- 葛西 真記子 (2014). 児童期・思春期のセクシュアル・マイノリティを支えるスクールカウンセリング 張間 克己・平田 俊明 (編) セクシュアル・マイノリティへの心理的支援 同性愛, 性同一性障害を理解する (pp. 123-139) 岩崎学術出版社
- 葛西 真記子・岡橋 陽子 (2011). LGB Sensitive カウンセラー養成プログラム」の実践 心理臨床学研究, 29(3), 257-268.
- 桐原 奈津・坂西 友秀 (2003a). セクシュアル・マイノリティとカミング・アウト 埼玉大学紀要 教育学部 (教育科学 I), 52(2), 121-141.
- 桐原 奈津・坂西 友秀 (2003b). セクシュアル・マイノリティに対するセクシュアル・マジョリティの態度とカミング・アウトへの反応 埼玉大学紀要 教育学部 (教育科学 I), 52(1), 55-80.
- Laumann, E. O., Gagnon, J. H., Michael, R. T., & Michaels, F. (1994). *The social organization of sexuality: Sexual practices in the United States*. Chicago: University of Chicago Press.
- 眞野 豊 (2014). 同性愛嫌悪の内面化とクローゼットの不在との間：地方に生きるゲイのライフストーリーの考察から 地球社会統合科学研究, 1(1), 71-80.
- 松嶋 淑恵 (2012). 性的異和を持つ人々の実態調査—経済状況, 人間関係, 精神的問題について—

- 人間科学研究, 34, 185-208.
- Mayfield, W. (2001). The development of an internalized homonegativity inventory for gay men. *Journal of Homosexuality*, 41, 53-76.
- McCarn, S. R. & Fassinger, R. F. (1996). Revising sexual minority identity formation :A new model of lesbian identity and its implications for counseling and research. *The counseling Psychologist*, 24, 508-534.
- Meyer, I. H., & Dean, L. (1998). Internalized homophobia, intimacy, and sexual behavior among gay and bisexual men. In G. M. Herek (Ed.) *Stigma and sexual orientation: Understanding prejudice against lesbians, gay men, and bisexuals* (pp. 160-186). Thousand Oaks, CA: Sage.
- Meyer, I. H. (2003). Prejudice, social stress, and mental health in lesbian, gay, and bisexual populations- conceptual issues and research evidence, *Psychological Bulletin*, 129(5), 674-697.
- 宮腰 辰男 (2012). セクシュアルマイノリティを生きるということー同性愛者がセクシュアリティを受け入れるプロセスー カウンセリング研究所紀要, 35, 63-77.
- 宮腰 辰男 (2013). セクシュアルマイノリティを生きるということーカミングアウトとコミュニティをめぐる危機と回復についてー カウンセリング研究所紀要, 36, 39-52.
- Morgan, E. M. (2013) Contemporary issues in sexual orientation and identity development in emerging adulthood. *Emerging Adulthood*, 1(1), 52-66.
- Nungesser, L. (1983). *Homosexual acts, actors, and identities*. New York: Praeger Publishers.
- 小宮 明彦 (2015). 同性愛嫌悪をめぐる日英 (教育) 文化比較ー明示的差別の国イギリスと黙示的差別の国日本ー 教育学研究室紀要: 「教育とジェンダー」研究, 12, 30-41.
- Pistella, J., Salvati, M., Ioverno, S., Laghi, F., & Baiocco, R. (2016). Coming-out to family members and internalized sexual stigma in bisexual, lesbian and gay people. *Journal of Child and Family Studies*, 25(12), 3694-3701.
- Rosario, M., Hunter, J., Maguen, S., Gwadz, M., & Smith, R. (2001). The coming-out process and its adaptational and health-related associations among gay, lesbian, and bisexual youths: Stipulation and exploration of a model. *American Journal of Community Psychology*, 29(1), 133-160.
- Rosario, M., Schrimshaw, E.W., & Hunter, J. (2011). Different patterns of sexual identity development over time: Implications for the psychological adjustment of lesbian, gay, and bisexual youths. *Journal of Sex Research*, 48, 3-15.
- Ross, M.W., & Rosser, B.R. (1996). Measurement and correlates of internalized homophobia: A factor analytic study. *Journal of Clinical Psychology*, 52(1), 15-21.
- Sandfort, The G. M., Graaf, R de., Bijl, R.V., & Schnabel. P. (2001) Same-sex sexual behavior and psychiatric disorders: Findings from the Netherlands mental health survey and incidence study (NEMESIS). *Archives of General Psychiatry*, 58, 85-91.
- 三宮 愛 (2014). 女性同(両)性愛者のコミュニティ参加は精神的健康・自尊心にどのような影響を及ぼすかー面接法と質問紙調査法による検討ー 女性学評論, 28, 133-161.
- Savin-Williams, R. C. (1989). Coming out to parents and self-esteem among gay and lesbian youths. *Journal*

- of Homosexuality*, 18(1-2), 1-35.
- Shidlo, A. (1994). Internalized homophobia: Conceptual and empirical issues in measurement. In G. M. Herek (Ed.), *Lesbian and gay psychology: Theory, research and clinical applications* (pp. 176-205). Thousand Oaks, CA: Sage.
- 品川 由佳・兒玉 憲一 (2005). 男性同性愛者に対する男性臨床心理士のクリニカル・バイアスの予備的研究 日本エイズ学会誌, 7(1), 43-48.
- 品川 由佳 (2006). 男性同性愛者に対するカウンセラーのクリニカル・バイアスとジェンダー関連要因との関係--実験法によるカウンセラー反応の検討 広島大学大学院教育学研究科紀要 第三部 教育人間科学関連領域, 55, 297-306.
- 杉山 貴士 (2006). 性的異和を抱える高校生の自己形成過程：学校文化の持つジェンダー規範・同性愛嫌悪再生産の視点から 技術マネジメント研究, 5, 67-79.
- Szymanski, D. M., & Chung, Y. B. (2001). The lesbian internalized homophobia scale: A rational/theoretical approach. *Journal of Homosexuality*, 41, 37-52.
- Troiden, R. R. (1979). Becoming homosexual: A model of gay identity acquisition. *Psychiatry: Journal for the Study of Interpersonal Processes*, 42, 362-373.
- Troiden, R. R. (1989). The formation of homosexual identities. *Journal of Homosexuality*, 17 (1-2), 43-73.
- 柘植 道子 (2014). セクシュアル・マイノリティ大学生を支える学生相談 張間 克己・平田 俊明 (編) セクシュアル・マイノリティへの心理的支援 同性愛, 性同一性障害を理解する (pp. 123-139) 岩崎学術出版社
- 梅宮 新偉 (2002). セクシャル・マイノリティの人権と教育 メディア教育開発センター研究報告, 32, 57-75.
- 和田 実 (1996). 青年の同性愛に対する態度：性および性役割同一性による差異 社会心理学研究, 12(1), 9-19.
- 和田 実 (2008). 同性愛に対する態度の性差：同性愛についての知識, 同性愛者との接触, およびジェンダー・タイプとの関連 思春期学, 26(3), 322-334.
- 和田 実 (2010). 大学生の同性愛開示が異性愛友人の行動と同性愛に対する態度に及ぼす影響 心理学研究, 81(4), 365-363.
- Worthington, L. R., & Reynolds, L. A. (2009). Within-group differences in sexual orientation and identity. *Journal of Counseling Psychology*, 56, 44-55.
- 渡辺 大輔 (2005). 若年ゲイ男性の学校内外での関係づくり：学校空間が持つ排除と分断の政治の検討にむけて 教育學研究, 72(2), 210-219.
- Weber, G. N. (2008). Using to numb the pain: Substance use and abuse among lesbian, gay and bisexual individuals. *Journal of Mental Health Counseling*, 30(1), 31-48.
- Williamson, I. R. (2000). Internalized homophobia and health issues affecting lesbians and gay men. *Health Education Research*, 15, 97-107.

- 山本 章加・大蔵 雅夫・重本 津多子 (2012). パーソナリティとイメージが同性愛者に対する態度に与える影響 徳島文理大学研究紀要, 84, 85-91.
- 安尾 利彦 (2017). 病院で働く心理職・各論 HIV 野村れいか (編) 病院で働く心理職—現場から伝えたいこと (pp. 124-134) 日本評論社